



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

『浜松中納言物語』：巻三注釈（二）

著者	浜松中納言物語の会 巻三分会
雑誌名	日本文藝研究
巻	71
号	2
ページ	1-28
発行年	2020-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029010

『浜松中納言物語』 卷三注釈 (二)

浜松中納言物語の会 卷三分会

本稿は、本誌第七十一号第一巻掲載分の続稿である。会の来歴や「凡例」についてはそちらをご参照いただきたい。今回は、『浜松中納言物語』 卷三のうち、「竹の中に通ひ路ありければ」京に御文ども書きて遣はす」までの範囲（小学館新編日本古典文学全集『浜松中納言物語』二〇五頁一二行目～二一三頁一四行目に該当）をこの場を借りて公表する。この間の参加者は、星山健（本学教授）・松浦あゆみ（京都女子大学非常勤講師）・八島由香（花園大学非常勤講師）・横山恵理（大阪工業大学講師）の四名である。なお、各区分の担当者は以下のとおりであるが、いずれも参加者全員による討議を経たものである。

【七】吉野聖、吉野尼君に中納言のもたらした唐后の文箱を渡す。

― 底本六ウ⑥、新註二一八⑪、大系二六九②、桜楓一〇〇⑭、新全集二〇五⑫、全注釈五五三―

竹の中に通ひ路ありければ、聖この文箱を取りて持てまうでぬ。君はひとへにうち行ひ給ひて、今宵、夢に唐土の後の見え給へりければ、片つ方の心には思し遣りつつ、行ひ暮し給ひけ

るに、かかることなどうち聞きつけ給へる心地、夢か何ぞと胸つぶれて、この御消息せうそくを開けて見給ふに、あはれに悲しとも世の常なり。かばかり思し捨て果てにたる世の思ひ、この御消息見給ふに、なほさめがたげに思されて、「何の契吉野尼君りにて、さすがに親子とは結びながら、聞き通はすことだになく、燕つばきのあらむ別れのやうにては別れにしぞ」など思し続けるも、前の世までいみじう恨めしき御契りなり。

〔校異〕①別れの―底本「わかの」

注釈

○竹の中に通ひ路ありければ―【一】に吉野聖の堂は「山の方に堂いとをかしう建てて……奥竹を隔ててぞ人の家は見ゆる」とあり、吉野尼君の家も同様に奥竹が巡らされていたと推測される。

○この文箱―唐后が日本の母（吉野尼君）に宛てた手紙が入っている文箱のこと。卷一【三八】では唐后が吉野尼君に宛てた「沈の文箱の少し大きなる」を中納言に託す様子が語られ、卷二【四三】では「後のことづけ給ひし文箱を取り出でたれば、取る手も移るばかりなる沈の文箱の、大きやかなる」を中納言が開ける様子が語られる。【六】では「御消息」とあったが、ここでは御消息の入った「文箱」を強調した表現になっている。

○君―吉野尼君をさす。

○今宵、夢に唐土の後の見え給へりければ―今宵、夢の中に唐后がお見えになったので、の意。【二〇】で関連する夢を見ており、これから起こることへの予兆として示されている。卷一【七】や卷五にも同様の方法がある。

○片つ方の心には―仏道修行をするもう一方の心では、の意。《新全集》は「唐后を思うのは現世への執着であり、仏道修行に励む心に反する」と注を付す。吉野尼君の吉野姫君に対する情ではあるが、【五】には「愛執の煩惱離れがたきものなれば」とあり、吉野尼君が我が子への思いを切り捨てようとしている一方で、愛情に篤い人物として造型され

ていることが窺える。

○かかること―中納言が唐后からの手紙を持って吉野聖のもとを訪れたこと。また、手紙が届けられた経緯を示す。

○夢か何ぞと胸つぶれて―吉野尼君は、驚きで胸がつぶれるような心地がするという意。

○あはれに悲しとも世の常なり―しみじみ悲しい気持ちがすると言ってしまうのも不十分なほどである、の意。卷二【四五】では「あはれにかなしなどいふもととへむかたなし」とあり、この手紙を読んだ中納言が悲しさを言葉で言い表せないくらいだ、と表している。

○何の契りにて―後文の「別れにしぞ」にかかる。どのような宿縁によって生き別れになったのかという意。

○燕のあらむ別れのやうにては―《大系》《桜楓》《新全集》《全注釈》が「燕詩示劉叟」(『白氏文集』卷一・諷諭一・古調詩)の影響を指摘する。子に去られて悲しむ劉叟に対し、白居易が燕の親子の別れの例を出して論じた詩であるが、《新全集》は状況の違いから別伝がある可能性も指摘している。また、《全注釈》は「燕詩」以外にも民間で用いられていた慣用句の影響があることを推測し、「出典を特定することは困難なことである」と述べている。

○前の世までいみじう恨めしき御契りなり―唐后と吉野尼君の現在の離ればなれの状態はもろんのこと、その状態をもたらしただ前世からの宿縁までもたいそう恨めしいという意。【六】には「前の世のさるべきものの報ひ」とあり、前世からの宿縁が意識された本文が続いている。

【八】吉野聖、中納言との対面を吉野尼君に促し、尼君は中納言との対面を決意する。

(担当…星山健)

―底本七才⑨、新註二一九④、大系二六九⑩、桜楓一〇一⑤、新全集二〇六⑪、全注釈五五四―

聖、

吉野聖

「いとやんごとなく、おぼろけの人の思ひ寄るべうも侍らぬ山路を、みづから尋ね入り給へる御心ざし、世の常にはあらざんめるを、こなたに入れ奉り給ひて、つづさなることむねの旨を

聞こし召し申させ給はんや、よく候はむ」

と聞こゆ。吉野尼君「思ひ限りたる住まぬなどの、草の庵耽たふづかしきさまなるを、見え知られ奉らんも、

世を隔てたりとは言ひながら、かたじけなき御影どもの、御面伏おもてふせにてもあるべきかな」と憚はばか

らはしう思せど、この御文に、「うとうとしく思ひ聞こえず、みづから何なんごとごとも聞きこえよ」と

あり、「身みを代かへたるとさへ思ひなせ」とあるは、さるべきやうこそはあらめ。わが心も、あ

まりこの世のほかになりにけるにや、ものの恥づかしさもおぼえず。かたへはこの御消息の伝

へに、よろづ忘れ給ふなるべし。みなみおもて南面みなみおもてたつ方、とかく引き繕つくろひて、

「さらばしるべし聞こえよ」

とあれば、

「かうかう。おはしましなむやとなむ侍る」吉野聖

と申す。思し遣る方なく、遙かなる御名残のあたりと思ふには、いみじうなつかしう、心もと

なく思しつるに、喜びつつまうで給ふ。

〔校異〕①も―底本ナシ ②思ふには―底本「おもひには」

注釈

○いとやんごとなく―「みづから尋ね入り給へる」にかかる。

○おぼろけの人の思ひ寄るべうも侍らぬ山路―諸注とも「思ひ寄る」を、「思いつく」「考えつく」の意に取る。しかし、その場合、上に「尋ね入らむとは」などの省略を想定せねばならない。ここは、「愛着を感じる」または「思いをかけ

て近寄る」などの意に解すべきでは無いか。つまり、「普通の人なら心にかけることもございませぬ山路」といった訳となる。

○こなた——吉野尼君の住まい。

○つぶさなることの旨——「つぶさ」は細かで詳しいさま。『日本霊異記』には多くの用例が見られるが、『源氏物語』をはじめとする平安期時代の物語や仮名日記にはほとんど見られない。〈新全集〉頭注の説くように、「ことの旨」とともに男性（特に修行僧）の堅苦しい表現として、あえて用いられているのであろう。

○思ひ限りたる住まるなどの、草の庵恥づかしきまなるを——「思ひ限る」は「見限って捨てる」の意。〈全注釈〉は「思ひ限る」という動詞はあまり知らない」とするが、同時代以降の用例として、『狭衣物語』巻一「かりそめに行く方を思ひ限らんことは、あるまじう思ひながら」、『今とりかへばや』巻三「身を思ひ限るにつけても、いみじくあさましくおぼゆ」などがある。「住まるなどの」の「の」は同格の格助詞。全体としては、「この世を見捨てた住まいであつて、粗末な庵が恥ずかしいと感じられる様子であるのを」の意。

○世を隔てたり——この場合の「世」とは国のこと。吉野尼君と唐后が、親子でありながら異なる国で暮らすことをいう。○かたじけなき御影どもの、御面伏せにてもあるべきかな——「影」については諸注解釈が異なるが、この場、眼前にいない人の、想像される姿の意。「御影ども」とあるから、唐后だけでなく三の皇子も含めているのであろう。このような暮らしをする自分が中納言に直面することは、異国の后であり皇子である娘・孫の面汚しになるのではと吉野尼君は危惧するのである。『源氏物語』松風「この若君の御面伏せに、数ならぬ身のほどこそあらはれめ」。

○うとうとしく……聞こえよ——巻二【四五】に、唐后から吉野尼君に宛てた手紙の文言として、「中納言訪ね聞こえ給はむ。みづから対面し給ひて、この世のありさまなど、こまかに問ひ聞こえ給へ」、「おのが身を代へて渡りたると思しなして、よろづを頼み思し召せ」とあつた。

○さるべきやうこそはあらめ——しかるべき理由があるのであろう。唐后が手紙の中で、中納言が三の皇子の前世の子であると明かしていたことを踏まえるか。先の「かたじけなき御影ども」と合わせ、吉野尼君が娘唐后と孫三の皇子を

一組のものとして捉えていることがうかがえる。

○わが心も、あまりこの世のほかになりけるにや、ものの恥づかしさもおぼえず——吉野尼君は、浮世離れた暮らしをする自分ゆえか、中納言と直接対面することに恥づかしさを感じないとする。

○かたへはこの御消息の伝へに、よろづ忘れ給ふなるべし——吉野尼君が中納言との対面を決意した理由として、前文の内容とは別に、娘からの手紙を読み、さらに詳しい情報を彼から得たいという思いに駆られ、羞恥心も忘れているのであることをあげる。まず作中人物の主観に寄り添い、次いで語り手の立場から別の理由を想像するといった形で、重層的な叙述が施されている。

○南面だつ方——「家屋の「南面」は主に来客や晴の儀式に用いる場所であるが、俗世を捨てた庵にはそういう場は用意されておらず、強いて言えばそれらしいところという意で、「南面だつ」とされている」とする〈全注釈〉に従う。【二】に「ささやかなる寝殿だつものこそ、北の対にや、一つあれど」と語られている建物の構造と関わり。

○かうかう。おはしましなむやとなむ侍る——「これこれとのことです。おいでいただけますでしょうか、ということでございます」とする〈新全集〉の訳が適切であろう。

○思し遣る方なく遥かなる御名残のあたり——「思し遣る方なく遥かなる」は「思いを馳せることも叶わぬほど遠く離れた」の意で、唐后のいる唐土との距離感を示す。「御名残のあたり」は、唐后と縁のあるあたりの意で、吉野尼君を指す。

【九】中納言、吉野尼君と対面し、唐后の様子を語る①。

——底本八才⑩、新註二二〇④、大系二七〇⑭、桜楓一〇一⑰、新全集二〇八①、全注釈五六一一

たそがれも過ぎて、山蔭^{やまかげ}は何のあやめも見分かねど、ただ、人の御ありさまうち香る、もの
恐ろしきまでおぼえ給ふ。御簾の内に入れ奉りて対面^{たいめん}し給へり。おのおの御心の内、たぐひな

(担当…八島由香)

き人の御ゆかり、かたみに聞こえ出づべき言の葉もおぼえ給はざりけり。からうじて、とかく思し沈めて、

「身吉野尼君のありさまは聞こえさせずとも、推し量らせ給ふらむ。かやうに人に聞かれ奉るにつけても、世づかず、いかに待ち聞きおぼさるらむと、恥づかしう心憂く侍れども、さすがにまだ背そむかれぬこの世の闇に侍れば、聖の伝へ申し侍りにし後は、あはれにいぶせき心地し侍りつつ、かけてだに聞き通ひ侍らざりし折よりも、なかなかもの思ひまさられ侍るに、この御消息せうそくにいとどしき心地し侍りて、鳥の声だにも聞こえぬ山蔭やまかげに、思ひもかけぬ心地し侍るに、すべてえこそよろづ分かれ侍らね」

とうち泣きて、

吉野尼君
うつつにはあらぬこととぞ待ち見つる夢ゆめまぼろし 幻まぼろしかかげるふかこは

とのたまふけはひ、かばかり深き山に、世を捨て離れたる山伏とは、夢の中にもおぼえ給はず。まだいと若やかに、なつかしう匂ひあるほど、「雲居唐居のほかの人の契りは」とのたまひし人の御けはひに通へる心地するに、いとど涙もとどまらず。

注釈

○たそがれも過ぎて、山蔭は何のあやめも見分かねど―黄昏時も過ぎて、ただでさえ暗いのに、山の中の暗がりでは何の見分けもつかないけれど、の意。この暗さの表現は後文との関わりから、中納言の「もの恐ろしきまで」の美しさ**を強調している**↓【参考】。これ以降、中納言を迎え入れる吉野尼君の視点へと転じている。

○ただ、人の御ありさまうち香る―ただ、中納言の美しい御様子が香り立つように漂っていて、の意。「人」は、中納言のこと。巻一でも、蜀山へ来訪した中納言の、山陰で一層引き立つ美しさが、御簾の内の唐后によつてたたえられている場面があつた↓【参考】参照。また、「仏などの変じあらはれ給へるにや」（二二）、「仏のあらはれて出で給へらむよりも、めでたく見奉りて」（二三）と表現される中納言の神々しいばかりの姿・容貌の美しさは、「恐ろしき」と感じさせるものであつたと考えられる。なお、諸注は、「人」を尼君のこととする。

○御簾の内に入れ奉りて―吉野尼君は中納言を御簾の中に入れ、直接対面をする。出家した身とはいえ、初対面の男性と直接対面するのは、唐后の手紙に「うとうとしく思ひ聞こえず、みづから何ごとも聞こえよ」（八）とあつたからである。

○たぐひなき人の御ゆかり―くらべることができないほど大切な人の御縁者。中納言にとつて吉野尼君は愛する唐后の母であり、吉野尼君にとつて中納言は離れて想う娘と縁がある人物である。【八】参照。

○身のありさま―吉野尼君の身の上。吉野尼君の身の上は、聖が中納言に語った【四】・【五】・【六】に詳しい。吉野尼君は、おそらく聖が中納言に自分の身の上を話しているだろうと考え、身の上の説明を省いている。物語としては、既出の情報を省く手法を使っている。

○いかに待ち聞きおぼさるらむ―このような（浮世離れした）者の身の上を、心待ちにして聞いたあなた様（中納言）は、いったい（私のことを）どう思つていらつしやるのであろうか、の意。「待ち聞」いたのは、中納言と解す。諸注、「待ち聞」いたのは唐后と解し、唐后がどんなに私からの消息を聞きたいと待ち受けていらつしやるでしよう、としている。これら諸注の内、〈大系〉〈新全集〉は、「待ち聞く」だと尼君から唐后への返書が届いていないという物語の実情と合わないことを指摘している。〈大系〉は補注で、「まちきき」の「ま」を「う」の誤写（字↓万）と見ていゝなら、「うち聞」いたのは中納言と解せる可能性を示唆している。

○まだ背かれぬこの世の闇に侍れば―（もう私は一度出家をしているのに）まだ離れることができないこの世での子ゆえに迷う心の闇でございすので、の意。「この世」の「この」には「子の」を掛ける。「人の親の心は闇にあらねども

子を思ふ道にまどひぬるかな」(『後撰集』卷十五・雜一・一一〇二・藤原兼輔)に影響を受けた表現。ここで使われる「この世の闇」の表現・修辭については、『源氏物語』賢木巻で藤壺の出家に際して源氏が詠んだ歌「月のすむ雲居をかけてしたふともこのよの闇になほやまどはむ」と、この歌に対する、出家してもなお、親が抱く子への気持ちと詠った藤壺の返歌「おほかたのうきにつけては厭へどもいつかこの世を背きはつべき」の贈答が踏まえられているとみるべきであろう。同様の表現として、『寢覚物語絵巻』に、出家した寢覚の君が、子(まさこ君)の窮状を見るに忍びず、冷泉院に送った歌「暗からぬ道にたづねて入りしかどこの世の闇はえこそはるけね」がある。

なお、諸注は本文を「また背かれぬ」とし、(もう私は一度出家しているのだから)また出家をすることができないこの世での子ゆえに迷う心の闇でございしますので、の意にとっている。《新全集》頭注では「時のまも恋しきことのなぐさまば世はふたたびも背かざらまし」(『後拾遺集』卷十七・雜三・一〇三〇・中宮彰子)を参考歌としてあげる。

○聖の伝へ申し侍りにし後―聖がお伝え申し上げることを聞いた後は、の意。聖は渡唐時に、唐后から聞かれるままに母である吉野尼君の動向を語っている(卷一【八】、卷二【四四】)。その際の対面の様子を語り聞かせたと考えられる。

○かけてだに聞き通ひ侍らざりし折よりも、なかなかもの思ひまさられ侍る―ほんのわずかなことでさえ、母と娘、お互いのことを聞き交わせなかつた時よりも、(聞き交わした後は)ますます物思いが募るようになりました、の意。「聞き通ふ」は、【七】でも「さすがに親子とは結びながら、聞き通はすことだになく」と使われており、お互いの状況などの情報交換をするという意味で解すことができる。

ただ他作品では、「三の君はわが夫取りたる人の類なれば、近うて聞き通はむを」(『落窪物語』卷三)、「京にさばかりの人のおはしおはせずおのづから聞き通ひて」(『源氏物語』浮舟巻)というように、情報や噂が広がり、耳に入ってくるという意味で使用されていることが多い。

○鳥の声だにも聞こえぬ山蔭―鳥の声さえも聞こえない(深い)山の中、の意。『古今集』卷一一「とぶ鳥の声もきこえぬ奥山のふかき心を人は知らなむ」(恋一・五三五・よみ人しらず)による表現。ここでは吉野尼君による形容だが、

【一】では、中納言の目線から「鳥の音だに世の常なるは聞こゆべうもあらぬ世界」と表現されており、意味内容が異なる。

○思ひもかけぬ心地し侍る―（中納言が唐后の手紙を携えて訪ねてきたことが）思いがけない気持ちがいえます、の意。

○「うつつには……」の歌―現実では、もはやないことだと思いつつも（唐后の手紙を）待っていたところ、ついにこのように手紙を見ることができたのでした、夢まぼろしなのか、陽炎なのか、この出来事は、の意。【七】で娘から手紙が届けられた時の吉野尼君の心境「かかることなどうち聞きつけ給へる心地、夢か何ぞと胸つぶれて」などを歌に詠んだもの。

この歌は、さまざまな歌によるイメージの影響がうかがえる。歌に使われている「夢」「うつつ」の背景には、『伊勢物語』六九段の斎宮「君や来しわれやゆきけむおもほえず夢かうつつか寝てかさめてか」と昔男「かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは今宵さだめよ」の贈答歌、『源氏物語』若紫卷「（源氏は）いとわりなくて（藤壺を）見たてまつるほどさへ、現とはおほえぬぞわびしきや」の地の文に続き、源氏「見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがな」と藤壺「世がたりに人や伝へんたぐひなくうき身を醒めぬ夢になしても」の贈答歌が踏まえられていると考えられる。また、「かげろふ」に関しては、『桜楓』が「夢よりもはかなき物は陽炎のほかにみてし影にぞありける」（『拾遺集』恋二・七三三・詠み人知らず）を参考歌としてあげている。

語句の用例としては、「あらぬこととぞ」に関して『新全集』が「この世にはあらぬこととぞおもほゆる空にはひびき水の流れて」（『うつは物語』楼上 下 式部卿宮）を参考歌としてあげている。歌の末尾の「こは」に関しては、『全注釈』が「わざとこぞくりはなつめれまがり木にはひまつはるるあをつづらこは」（『慶法師集』八九）、「すき心ひとにつくればあらをだのうちたのむべきなかやまかこは」（『相模集』四三二）を参考歌としてあげている。

○かばかり深き山に、世を捨て離れたる山伏とは、夢の中にもおぼえ給はず―（中納言は吉野尼君を）世俗を捨て、このような深い山で暮らす仏道修行者とは、夢の中のこととしてもお思いなさらず、の意。吉野尼君の歌の詠みぶりや、

直後に描かれる若々しさや、つやつやとした美しさが漂う様子は、深い山の中で遭遇するとは思われないものであり、また山に住まう仏道修行者としても考えることができない様子である。「夢の中」は、吉野尼君の歌の「夢幻か」と呼応した表現。また、吉野尼君の「うつつには」歌の表現も含め、『伊勢物語』九段「ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、蔦かへでは茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり……駿河なるうつつの山辺のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」と似通うところもあろう。

○「雲居のほかの人の契りは」とのたまひし人の御けはひ―「雲居のほかの人の契りは」とお詠いになった唐后の御様子、の意。「雲居のほかの人の契りは」は、巻一【一九】で山陰の女（後にその正体は唐后だと判明する）が一夜の逢瀬で「憂しと思ふあはれと思ふ知らざりし雲居のほかの人の契りを」と中納言に詠みかけた歌のことである。この和歌の初句を引き、巻一【一九】の場面を回想する例としては、巻一【二四】【三四】の二例、巻三の当該箇所、巻四の二例と、全部で五例ある。巻一では山陰の女と同一人物かどうかという回想で使用され、巻三以降は唐后本人のイメージを回想する際に用いられている。

○いとど涙もとどまらず―吉野尼君との対面によって引き起こされていた中納言の涙は、彼女が唐后と似ていると感じるにつけても、ますます流れ続けてとまらないのである。

【参考】「山蔭」のイメージと表現方法

山蔭は、深い山の中の意で、人が訪れることがないのはもとより、鳥の声すら聞こえないと表現される（当区分「鳥の声だにも聞こえぬ山蔭に」場所である。本作品では深吉野が「山蔭」と称される場所である。巻四「見し山蔭の夕暮れに」「げに住み馴れつる山の蔭にはかに立ち離れ」のように、「山蔭」が深吉野そのものを指す使用例もある。他作品、例えば『源氏物語』では、「なのめなる際のさるべき人の使だにまれなる山蔭」（橋姫巻）と、宇治が「山蔭」とされる場所であり、「蛸の鳴く声に、山の蔭のみ恋しくて」（宿木巻「山蔭」の異文あり）と「宇治」そのものを指す使用

例もある。

また、「山蔭」の「かげ」との関わりで、「山のため蔭になること。また、その場所」(日本国語大辞典 第二版)という意味を含めて使用されるため、朝でも薄暗い、日が暮れるのが早いといった使われ方も多い。唐后の父大臣が隠居した山深い蜀山は「朝ぼらけの山蔭、木暗く霧りわたるに」という風景描写がある。中納言と唐后との一夜の逢瀬があった「山陰」という地名もその延長としての地名であろうか。他作品では、「山かげなればにや、日も既に暮れかかりぬ」〔平家物語〕灌頂卷 大原入 などがある。その暗さから、当区分「たそがれも過ぎて、山蔭は何のあやめも見分かねど」や「一五」「明け暮れも山の蔭には分かれぬを」のように、物の区別がはっきりしないとまで表現されることもある。

そのような使われ方と併せて、「蔭」と「光」もしくは人物の「光り輝くような美しさ」と対比させることで、その美しさや輝きが強調される表現もある。本作品では、卷一「二五」(中納言の姿は) 山蔭にて見るはめづらしく、目も輝く心地するに」、当区分の「山蔭は何のあやめも見分かねど、ただ、人の御ありさまうち香る」などがその例で、中納言の理想的な美を引き立てる状況設定となっている。他作品では、「かく、しばしば立ち寄せたまふ光に、山の蔭も、すこしもの明きらむる心地してなん」(『源氏物語』橋姫巻)、「山蔭の暗がりたるところを見れば、螢は驚くまで照らすめり」(『蜻蛉日記』中巻) などがある。

【二〇】中納言、吉野尼君と対面し、唐后の様子を語る②。

— 底本九ウ⑥、新註二二①④、大系二七一⑮、桜楓一〇二⑭、新全集二〇九⑨、全注釈五六七 —

〔中納言〕うつつとも夢ともえこそ名のられね尋ぬるほどのこの世ならねば

唐土^{ちゆうど}の皇子を見奉るべきゆゑ侍りて、遥かに渡りまかり侍りつつ、あはれに悲しきことをのみ見聞き侍りし中に、「今は」とてこなたへまかり帰りしほど、河陽^{かうやうけん}県に召しありて、『唐后^{ちやうご}・三の皇子

(担当…八島由香)

人々をも置きながら、おぼろけの人、渡り来^くべくもあらぬ世に、渡り来たる心ざし世の常ならしを、なほ必ず、帰りても思ひ出でば……。よろづ隔^へたり、その御行方^{ゆくへ}知らぬが、世にある効^{かひ}なく、心憂く思ひ嘆かるるを、必ず必ず尋ね聞こえて、この御消息を伝へ聞こえさすべき」よし、皇子も后も、泣く泣く仰せ言侍りしかば、これより深き御住まひなりとも、必ず尋ね参るべきものと、思ひ給へられしかど、かやうにみづからなど聞こえさせ侍りぬるは、なほ夢の心地せられ侍りてなむ」

とて、仰せられしさまなど、あはれに心深げに語り出で給へるを、聞き給ふに、なほさらにさうにあはれ忍ばむ方なし。

注釈

○「うつつとも……」の歌―それは現実だとも夢だともはつきり言うことができません、私が探し訪ねてきたこの深^み吉野^{よしの}が、そもそも現世ではないのですから、の意。前区分の吉野尼君の歌に対する返歌（九）参照。「名のる」は、「はつきり言う、明言する」と解したが、このように使われるのは珍しい。他作品の用例の中では、『落窪物語』卷三の「家といふものは（券持たる人より外に領^しる人なき」と聞きしかば、おだしう思ひてあるは、『わが家』とも名^な告^つらでありつるは」が、自らの名を名告るのではなく、「はつきり言う、明言する」の意味で取ることができる。

○唐土の皇子を見奉るべきゆゑ侍りて―唐帝の三の皇子は中納言の父が転生したものである。父の転生を夢で知った中納言は、父と再会をするために渡唐をした。この事情は、唐后が吉野尼君に宛てた手紙（卷二【四五】）に書かれており、吉野尼君はこの事情をすでに知っている。

○あはれに悲しきこと―唐后も三の皇子も唐帝の寵愛をうけているがゆえに、一の後やその父である一の大臣に妬まれ、

唐后の父大臣が地位を捨てて蜀山に籠り住み、唐后と三の皇子も河陽県に移り住んだこと(卷一【七】)などをいうのであろう。

○こなた—日本のこと。

○河陽県に召しありて……泣く泣く仰せ言侍りしかば—中納言が唐后と三の皇子に対面したのは、帰国二日前である(卷一【三八】)。「さるべき人々」から、唐后と三の皇子の発言が始まり、発言の終わり部分は流れているが、「この御消息を伝へ聞こえさすべき」で便宜的に切った。

○さるべき人々をも置きながら—日本に大切な人々を残しておきながら、の意。「渡り来たる心ざし」にかかる。唐后と三の皇子が中納言の渡唐を評価した部分。

○渡り来たる心ざし世の常ならじ—中納言の渡唐した理由は、卷一冒頭部(一)にもあるように、父への「孝養の心ざし」である。後文では、そのような並々ならぬ「孝養の心ざし」があるのであれば、私(唐后)が抱く、母に対する思いもわかつてくれるであらう、という意図が含まれた会話文が続いている。

○なほ必ず、帰りても思ひ出では……。—あなた(中納言)が日本に帰っても、私たち(唐后と三の皇子)を思い出すならば、やはり必ず(吉野尼君宛の手紙を届けて下さい)、の意。言いさした表現と解した。諸注は本文を「なほ必ず、帰りても思ひ出では」とし、後文に続くものとするが、その場合「なほ必ず」は「必ず必ず尋ね聞こえて、この御消息を伝へ聞こえさすべき」にかかることになり、表現として不自然である。

○よろづ隔たり、その御行方知らぬが—私たち(唐后と三の皇子)にはすべてが遠く隔たつて、母の御行方を知らないの意。唐后と吉野尼君は、唐土と日本とに遠く隔たり、近況を知ることが不可能である。

○世にある効なく、心憂く思ひ嘆かる—親へ孝養を尽くせない私(唐后)は、この世に生きているかいがなく、つらいと思って嘆くよりほかはない、という意。卷一【八】では、「ただ母君の行く方も知らず、あひ見るべき世もなき嘆きをし給ひし御身」と表現されている。

○皇子も后も、泣く泣く仰せ言侍りしかば—卷一【三八】では、三の皇子は、中納言との対面の場に同席しているが、

「泣く泣く仰せ言」をしているわけではない。しかし、中納言は唐后との男女関係を隠蔽するために、本来の渡唐目的である三の皇子の存在を強調している。

○これより深き御住まひなりとも——ここから唐后と三の皇子の依頼を受けた中納言の心情を示す。「これ」は深吉野のこ^{みよし}と。深吉野^{みよし}よりもさらに山の奥の住まいであろうとも、の意。

○夢の心地——中納言は手紙を届けようと思っではいたが、このように直接お会いして手紙を届けられるとは思わず、「夢の心地」と言い表している。前区分や本区分で吉野尼君と中納言が詠んだ歌の内容とも関わってくる。

○仰せられしさま——唐后が中納言に手紙を託した際の言葉や、その時の唐后の様子など。

○聞き給ふに、なほさらにさらにあはれ忍ばむ方なし——（中納言の発言を）吉野尼君がお聞きになると、（中納言が唐后の手紙をもたただけでも、ただでさえ感動の涙がこらえられないのに）その上さらにさらに涙をこらえることができない、の意。

【二】中納言、吉野尼君と対面し、唐后の様子を語る③。

（担当…星山健）

——底本一〇ウ③、新註二二三③、大系二七二⑫、桜楓一〇三⑦、新全集二二〇⑪、全注釈五六七——

「世^{吉野尼君}に知らずめづらかに侍りける宿世を、聞かせ給ひけむ御心の内、恥づかしくも思ひ聞こえさすれど、今はかかるひたぶるの山伏だちて侍る身には、この世の思ひ、恥ぢなどは、思ひ侍るべきにもあらずかし。御消息にも、必ず頼み聞こえさすべきやうに侍るめるも、さるべきゆゑこそ侍らめと思ひ給ふれば、なほ生き巡らひ侍らむほどは、心をかけ頼み聞こえさすべきにこそは」

などのたまふも、残りある心地して、「若^{中納言}うては、をかしうなどものし給ひけむかし」とおほ

え給ふにも、「^{中納言}げに、いと世に似給はざりける御ありさまかな」と、心劣りはせであはれとの
み思ひ遣らる。

「^{中納言}道のほどの遥けきなど、おぼろけにては思ひ立つべくも侍らざりければ、かく参りて候ふ
ついでに、しばしこの聖の室^{むろ}に候ひて、御宿直^{とのみ}なむどもと思ひ給ふれば、心のどかに何ごと
も」

とて立ち出で給ふほど、月さし出でたり。

注釈

○世に知らずめづらかに侍りける宿世——世間に類例がなく珍しいものでございましょう宿縁、の意。具体的には尼君自身と唐后との関係を指す。

○御心——中納言の心。

○ひたぶるの山伏だちて侍る身——途に山伏のように暮らしをしております身、の意。「ひたぶる」の語は吉野尼君の出家生活を語る上でたびたび用いられている（本巻【五】【二三】など）。なお、「ひたぶるの」の同時代の用例は多くないが、〈全注釈〉【補説】「ひたぶるの」について」があげる『うつほ物語』『大鏡』の例の他、『紫式部日記』『月を見、花をもめづる、ひたぶるの艶なることは、おのづからもとめ、思ひてもいふらむ』なども見られる。

○この世の思ひ、恥ちなどは、思ひ侍るべきにもあらずかし——「思ひ、恥ち」という並べ方、「思ひ」を「思ひ侍る」という続き方など不自然な点が多い。（大系）補注が説くように誤写の可能性があるか。

○なほ生き巡らひ侍らむほどは——「生き巡らふ」は「生き長らえている」の意。近い時代の用例として、『大和物語』一例「まだなむかくあやしきことは生きめぐらひはべる」の他、『源氏物語』一例、『夜の寝覚』二例が確認できる。な

お、同意の表現としては「ながらふ」の方が一般的。

○残りある心地して―《全注釈》が説くように、「これで終わりという気持ちがせず、なおまだ対面して話を聞いていたような状態」を言う。『源氏物語』若菜上「物越しに、はつかなる対面なん、残りある心地する」。

○げに、いと世に似給はざりける御ありまかな―尼君が歩んだ数奇な運命と修行者めいた暮らしをする現状に対する中納言の感嘆。

○心劣りはせで―《新全集》が説くように「消極的な讃辞」である。中納言のここでの尼君評価は、決して高いものではない。

○あはれとのみ思ひ遣らる―「思ひ遣らる」の対象について、《新全集》などは唐后とするが、《大系》に従い、尼君の身の上に自然と思いはせたものと解する。

○宿直―本来は宮中や貴人宅に職務として宿泊し警備などに当たることを意味するが、ここではしかるべき人物の夜の話し相手を務める意で用いられている。

○月さし出でたり―「頃は三月の二十日のほど」(二)であるから、月の出は遅い。【九】の「たそがれも過ぎて」から相当の時間が経過したことがうかがえる。

【二二】中納言、吉野聖に吉野姫君の消息を尋ねる。

(担当…松浦あゆみ)

―底本一―オ⑩、新註二二二⑭、大系二七三⑨、桜楓一〇四①、新全集二二一⑪、全注釈五七四―
とかく見巡らせば、峰にかたかけて、松原の下に、ささやかなる寝殿だつものこそ、北の対
にや、一つあれど、いみじう荒れ惑ひて、人声もせず。深き山といへど、おのづから人の住む
やうもありなむを、さすがにいみじく心細くて、山よりたぎり落つる滝の音耳近きに、松風の
吹き合わせたる心細さは言ふ限りなし。とばかりうち見巡らすに、身に染むばかりすこう寂し

きに、「いかで、かくて過ぐし給ふらむ。河陽県にいみじき清らを尽くして、わが御身はいつかれおはすれど、げに効なきわざなりや。ただ今も金翅鳥といふなる鳥になりても飛び行きて、かくなむおはしますとも、いみじう告げ奉らまほしう」とばかり眺め入りて、聖の方へ入り給へれば、なかなか、弟子ども、下法師どもなどありて、人目しげきやうなり。「この聖を頼もし人にて、過ぐし給ひにけるにこそは」と見ゆるも、いみじうあはれにて、

「この若き人も、ここにやものし給ふ」

と問ひ給へば、

「さらなりや。いづこにかおはしまさむ。尼になりて後、生み給へりければ、心憂しとて、隠し忍びて、見ず知らじとのたまひけれど、生ひ立ち給ふまに、いと清らにもものし給ふなれば、え思し捨てず、御行ひの紛れに、心苦しう思し嘆くやうにこそ承れ。琴をぞいとおもしろく調べ給ふやうに、折々承り侍る」

と語るに、身をなげきに思したる人こそあらめ、若からむ人の住まひには、いと恐ろしき所なりし。昔物語などにこそ、かかることは聞け、めづらかにあはれなることをも見聞くかな。ただ一人の御ゆかりに、涙もろになりて、かかる御住まひを見置きて、立ち帰り給ふべき心もし給はず。もし世におはすることもこそとて、言伝け給ふものあるやうに聞きし。御文にはさも書かれざりし。いとあてはかに思ひまされて、聖には、

「しはし、かくてなむ侍るべき」

とて、京に御文ども書きて遣はす。

○とかく見巡らせば—吉野尼君の住まいを辞去してまもなくの中納言の動作。前区分の末で月が出たため、月明かりで辺りをあちこち見回せるようになったのである。

○峰にかたかけて—以下は、中納言が少し離れて見た、吉野尼君の住まいと周囲の環境。「峰にかたかく（＝片掛く）」は、峰に建物の片方を寄せかけて建てる意。卷二【四〇】で大将大君の御堂は、「山かたかけ池に造りかけて」すなわち庭の築山と池の端に寄せかけて造営されていた（『新全集』）。なお、【二】で吉野聖の寺の御堂は「山の方に」造営されていたが、吉野尼君のこの住まいはそれよりも更に山側の立地か。

○松原—後文において深吉野のイメージとして描かれる「松風」のための環境設定であろう。先行文学においては、吉野と松の結びつきは薄い。両者の組み合わせ例は、『万葉集』の一首と『拾遺集』の屏風歌一首しか確認できない。後者の『拾遺集』歌は、「見たたせば松の葉白き吉野山いくよ積もれる雪にかあるらむ」である（卷四・冬・二五〇・平兼盛・詞書「入道摂政（＝藤原兼家）」の家の屏風に）、『拾遺抄』『兼盛集』『和漢朗詠集』にも収録。なお「松原」は、『源氏物語』で光源氏や明石一族が参詣する住吉大社の名高い景として描かれる（『源氏物語』卷・若菜下巻）。

○ささやかなる寢殿だつものこそ、北の対にや、一つあれど—中納言が見た、吉野尼君の住まいの外観。小規模な寢殿めいた建物が、北の対であろうか、一つ（だけ）伴って、建っているが、の意に解した。↓【参考Ⅰ】

○いみじう荒れ惑ひて、人声もせず—「荒れ惑ふ」は、荒れ果てる、の意で、『源氏物語』では、未摘花の住む大雪時の常陸宮（未摘花巻）や、明石の君が移住する前における大堰の中務宮の別荘（松風巻）などの用例がある。「人声もせず」（用例の分布は『全注釈』参照）を（は）かなき宿^{やどり}の強調に用いる例は、夕顔怪死直後のなにがしの院（夕顔巻）がある。当該箇所では、この後も聴覚的な印象による描写が続く。

○深き山といへど、おのづから人の住むやうもありなむを、さすがにいみじく心細くて—中納言の心情。深山でも人が住む地になる可能性もあるように、吉野尼君の住まいがあまりにも荒れ果てているため、人心地がせず心細いのである。後続文でも（心細さ）を繰り返す（『全注釈』）↓【参考Ⅱ】。「おのづから人の住むやうもありなむを」は、『新全

集》の解に従い、もしかしたら吉野尼君達でなくとも他に人が住むような場合だつてあろうに、ととる。(『新全集』はこの語法例として『源氏物語』若菜上巻の光源氏から女三宮への戒め「いはけなき御ありさまなめれば、おのづからとりはづして、夕霧があなたを」見奉るやうもありなむ」を掲出する。『全注釈』は、(長い年月の間には)自然と人の住む趣もできてしまふだろうが(しかしこの深吉野は)、と解すが、従い難い。「さすがに」の「さ」は直前の「おのづから人の住むやうもありなむ」を受けると解するのが妥当であろう。

○山よりたぎり落つる滝の音―吉野の滝は『万葉集』以来和歌に度々詠まれており、本作品で描かれている「深吉野」の滝も「みよしのの吉野の滝に浮かび出づる泡をか玉の消ゆと見つらむ」(『古今集』巻一〇・物名・をがたまの木・四三一・紀友則)などに詠まれている。こうした吉野一帯における滝の激流のさまは、『古今六帖』(第四・恋・雑の思・二二三三)における題「人の心をいか頼まむ」への上の付句「手をさへて吉野の滝は堰きつとも」で恋の困難さの喩えになるほど古くから知られていた。『古今六帖』歌は『源氏物語』藤袴巻でも引歌に用いられている有名な歌であるが、その一方で同じく吉野の滝を詠んだ歌として知られているのが、次の『拾遺集』歌である。巻四・冬・二三五「冬寒みこほらぬ水はなけれども吉野の滝は絶ゆる世もなし」(異文「絶ゆるまもなし」)。『拾遺抄』巻四・冬・一四一にも同本文で収録)は、本作品の成立期においては『狭衣物語』巻一・巻二で主人公狭衣の恋の悲嘆を表す引歌に用いられている(ただし異文が多く、巻一では第二系統のみ、巻二では第一系統のみの各表現である)。なお、山の滝を近くに配した家の描写としては、本作品では巻一「二五」の唐土における蜀山の秦の親王(唐后の父大臣)邸、『源氏物語』では若紫巻の北山の僧都と妹尼君の住まいがあり、後者は滝の音が読経の声と響き合う場面の趣向が当該箇所と似通っている。

○耳近きに―近くに聞こえる感じで、の意。↓【参考Ⅱ】

○松風の吹き合わせたる心細さ―深吉野の荒涼たる様子として、吉野尼君の住まいの上方にある「松原」から吹く「松風」の音が、滝の音と一体化して描かれる↓【参考Ⅱ】。「松風」は、当巻末の四例でも、再訪した中納言の耳を通してやはり滝の音と共に描写されるが、その際には琴の音との響き合いから唐后のイメージを成すに至る重要な歌語で

ある（久下晴康〈裕利〉「唐后転生への道―持続する菊の心象―」（『平安後期物語の研究 狭衣浜松』新典社 一九七六年初出）。作中では他にも、巻四で三例あり、いずれも深吉野と吉野尼君・姫君母娘をめぐる用例である。山際咲清香「『浜松中納言物語』の〈風〉と寒暖語」「月」との関わりから」（『古代中世文学論考 第集』新典社、二〇一六年）では、これらの一連の場面における「松風」「嵐」などの〈風〉の吹く吉野の自然環境の厳しさによって、中納言が「心細し」と感じる心情が生じ、吉野尼君・姫君母娘との関係を深めていく役割を指摘する。

○とばかりうち見巡らすに―当区分最初の「とかく見巡らせば」の反復叙述。再述することにより、この間中納言が見回した吉野尼君の住まいと周辺の描写を締め括って、見聞した情景に対する中納言の心情へとつなげる。

○身に染むばかりすごう寂しきに―中納言は「滝の音」や「松風」が身に迫ってくる深吉野の自然に対し索漠とした寂しさを体感している。「身に染む」は、「松風」と共に歌ことばとして詠まれる傾向がある↓【参考Ⅱ】。本作品では、山陰女（＝唐后）の移り香の状態を表す一方で（三例）、当該例のような景物に対する感動や主要登場人物の美などの資質を表す際比喩的に用いられる（一一例）。当該例以外の比喩的な表現は次の通りである。中納言の美・才に対する四例（巻二【二一】二例・【二三】・【三七】）、唐后の美・手紙の言葉に対する三例（巻一【六】、巻二【三六】・【四六】）、吉野姫君の美に対する一例（巻五）、「花たちばな」の香や「山の端の月」に寄せた贈答歌の二例（巻三【二九】・巻末例）。

○いかで、かくて過ぐし給ふらむ―吉野尼君の深吉野での寂しい暮らしぶりを、中納言は案じる。

○河陽県に……げに効なきわざなりや―【六】で吉野聖が、「后の、かの国に、飾り据ゑられ給へる御おぼえありさまなど」にも関わらず、対照的な母吉野尼君の深吉野での厳しい隠遁のあり方は、「さる御娘の蔭にもえ隠れ給はず」と観じた見方を受け、「げに」唐后の華やかな境遇の恩恵を受けないものだと納得している。

○金翅鳥といふなる鳥―金翅鳥とかいうような（経典・書物などで見聞する）鳥、の意。「金翅鳥」はインド神話上描かれる大鳥「迦楼羅（カルラ）」の漢訳。両翅を広げると六千余里とも（『法苑珠林』）、三百三十六万里とも（『華嚴經探玄記』）いい、翅で大海水を打ち開いて竜を捕って食べる（『長阿含經』『私聚百因縁集』『宝物集』）などとされる。密

教においては文殊や梵天などの化身ともいう（中村元『広説仏教大辞典』など）。当該箇所では「金翅鳥」が著しい速さの喩えとして用いられるのは、〈全注釈〉の見解通り、『今昔物語集』卷一・第四話「馬の駿きこと、金翅鳥の如し」と通底する。加えて、遠く離れた唐土にいる唐后へ伝えに行ける存在として、前述の密教的な威力を以て世界中を飛び回る金翅鳥を喩えに用いているのであろう。

○かくなむおはします―唐后へ中納言が報告したい、深吉野^{みよしの}で見聞した内容。あなたのお母様（吉野尼君）がこのように荒涼たる深山の住まいで暮らしていらつしやる、ということ。

○聖の方へ入り給へれば、なかなか―「聖の方」は、【一】で描かれていた吉野聖の「廊だつ物をいとかりそめに造」った住まい。「なかなか」は、吉野尼君の住まいが人けのないさまであったのよりもかえって、の意で（大系）、「人目しげきやうなり」へかかる（新全集）。

○下法師ども―下働きである、身分の低い僧たち。当該箇所では、吉野聖の「弟子たち」とは別扱いされており、【一六】でも「弟子にも、下法師の品までも、野山の麓まで配らせ給ふ」とある。

○この聖を頼もし人にて、過ぐし給ひにけるにこそは―下に「あらめ」を省略する（大系）。中納言は弟子や下法師の動き回る様子を見て、こうした人手を擁するとはいえ、所詮は世捨て人の吉野聖を、吉野尼君が生活上頼りになる人にするしかない実情を「あはれに」推し測っている。「頼もし人」の当該箇所以外の作中例三例は、いずれも吉野姫君から見た中納言のことだが（全注釈）、血縁関係や性的関係の全くない間柄で経済・生活を支えてくれている人物を指した称である点が、当該箇所との共通点として注目される（佐野〈須田〉光子の日本文芸学会大会二〇〇三年六月二三日発表「源氏物語」における「たのもし人」という表現について）。〈新全集〉の掲出例、『源氏物語』宿木巻中の君を世話する薫の例もその一つであろう。また、平安時代散文作品の頼む・頼もし系の類似語彙がやはり夫以外の人物に用いられる傾向も、下記の論で指摘されている。滝沢貞夫「平安時代散文作品における「頼む」「頼もし」（中古文学）七〇 二〇〇二年一月）では、夫の呼称としての用例が『更級日記』の「頼む人」二例のみという調査結果を示す。ただし、滝沢論文はこれらの語彙について夫以外の身内を表すものと位置づけている。

○この若き人―唐后の異父妹である吉野姫君。吉野聖が、【五】で吉野尼君が出家して当初大内山で修行していた段階についての説明で、吉野姫君を「見知るべき人なければ、身に添へておはしますなるべし。」と中納言に語っていたのを受けて、「この」と尋ねている。

○さらなりや。いづこにかおはしますまむ―今更言うまでもございませぬ（吉野姫君はもちろん深吉野で吉野尼君に伴われていらつしやいます）。この深吉野以外のどこにいらつしやるはずもないでしょう。吉野聖の返答。

○尼になりて後、生み給へりければ、心憂しとて、隠し忍びて―【五】における吉野聖による説明でも、この後の【一八】における尼君自身の心情でも、吉野尼君が尼になった後に吉野姫君を出産したのを気に病んでいることが繰り返して述べられている点（桜楓）からすると、当時ではやはり極めて異常な事態なのであろう。

○生ひ立ち給ふままに……思し嘆く―吉野尼君が、美しく成長していく娘姫君を愛情ゆえに見捨て得ず、またそれゆえに自身の修行の妨げになると嘆く様子を、吉野聖が語ったもの。吉野姫君の美に関する説明「いと清らにものし給ふなれば」には、諸注の解する通り、吉野尼君からの伝聞を表す「なり」が添えられている。吉野尼君の心情については、【五】でも「心憂しとても、愛執の煩惱離れがたきものなれば」と語られていたが、その後も姫君の美しい成長ぶりが苦悩を深めているというのであろう。

○琴をぞいとおもしろく調べ給ふやうに、折々承り侍る―吉野聖も近隣で耳にしている吉野姫君の弾琴の様子。「琴」はここでは絃楽器一般。七絃琴の名手唐后の血縁にふさわしい楽才を備えていることを窺わせる情報。

○身をなげきに思したる人こそあらめ……いと恐ろしき所なりし―以下、地の文「ただ一人の……」一文を挿みながら、中納言の心情を自在に記す。「身をなげきに思したる人」つまり我が身を嘆かしく思い俗世を厭って自ら深吉野に住まいを定めた吉野尼君と対照させ、「若からむ人」吉野姫君の深吉野暮らしの心細さを思い遣る。「なげき」は諸注の解する通り、嘆きと投げ木（薪木）とを掛けた和歌的表现であろう。《新全集》は、加えて「身をなげ」つまり山などに行方をくらます意もとる。なお、「なりし」の本文は、《新註》《大系》《新全集》で「なりかし」に校訂するが、そのままでも詠嘆的に解せよう。

○昔物語などにこそ、かかることは聞け―「かかること」は、琴を「おもしろく」弾く若き佳人が荒れ果てた住まいに寂しく住んでいるような状態。「昔物語」の内容について、〈全注釈〉は仙境に住む若い女人についての民間伝承かとする。以下「見聞くかな」までの心情に似通う『源氏物語』の内容で、「昔物語」で聞くような、現実でありそうにない状況に置かれた姫君へ心惹かれる例としては、荒れ果てた常陸宮で末摘花が七絃琴を弹奏する音色を立ち聞いた光源氏の心情（末摘花巻）、霧りわたる宇治の片田舎で琵琶・箏の琴を弹奏する宇治大君・中の君姉妹を垣間見た薫の心情（橘姫巻）がある。

○ただ一人の御ゆかり―（かけがえのない大切な）たった一人の人（である唐后）の御血縁、の意。唐後の母吉野尼君も含むであろうが、中納言の関心は次第に異父妹である吉野姫君へと向けられてきている。【九】では「たぐひなき人の御ゆかり」という表現で、中納言・吉野尼君相互の思いとしてあった。

○かかる御住まひ―荒涼たる深吉野^{みよし}における、荒れ果てた住まい。

○もし世におはすることもこそとて……御文にはさも書かれざりし。―もし吉野姫君がお生まれになっている場合は姫君の世話を頼むと、唐后が吉野聖へ伝言しなさっているものがあるように聞いたなあ。私（＝中納言）が受け取った唐後の妹姫君宛て御手紙には、私に世話を頼むようにとは書いていなかったが、という意。中納言が「聞きし」唐後の心情部分「もし世におはすることもこそ」において、「世におはする」の主語は吉野姫君（〈大系 補注の別解〉、「もこそ」は「も」の単なる強調（〈大系 補注〉と解した。「言伝け給ふもの」の内容は吉野姫君の世話を頼むことであり、また「言伝け給ふもの」があると中納言が「聞きし」と言う以上、唐后から（中納言へではなく）吉野聖へ「言伝け給ふもの」であろう。ただし、作中には「もし世におはすることもこそとて、言伝け給ふもの」の該当本文が明確に見えず、不審。あるいは、【三】の吉野聖の説明において、聖が在唐中に唐后から母尼君宛ての「御消息」を託されるにあたり「いみじうねんごろに仰せ言侍りて」と略述している件を指すか。唐后の手紙で「さも書かれざりし」とするのは、巻二【四六】で吉野姫君宛の手紙に、その存在を吉野聖から聞いたとのみ記していることに該当しようか。一方、同巻【四五】の母尼君宛ての手紙では、中納言へ「よろづを頼み思し召せ」と明言していた。

「もし世におはすることもこそとて、言付け給ふもの」の該当内容については、諸注で他にも様々な解釈が示されている。〈新註〉〈大系〉では「もこそ」をやはり「も」の単なる強調とし、母吉野尼君が生きていた場合に備えての伝言や物、〈新全集〉や〈全注釈〉語注では「もこそ」を母吉野尼君がひどい苦境にあるならいけないと心配だという恐れとした上で、吉野姫君のこと自体を暗に伝言したものと、それぞれ解している。また、「聞きし」を〈新註〉〈大系〉〈新全集〉は唐后から中納言へ、と解す。しかし、こうした諸注の解釈や若君に関わる内容を考慮したとしても、卷一【三八】で母尼君への文箱を中納言に託した時の唐后の説明、卷二【四四】～【四六】で中納言が開封して読んだ唐后の文面、卷三【三三】～【三六】の中納言に対し吉野聖の説明で語られた唐后の伝言、そのいずれにも、該当する具体的な内容や表現は見出せない。また、〈新全集〉では、「言付け給ふものあるやうに聞きし」について、卷二末で手紙を開封した後に初めて「そう思つて考え」と、卷一【三八】の時点で唐后が吉野姫君のことを「伝言されたように聞いた」としているが、不審。

なお、〈桜楓〉は卷二【四六】の手紙を「言付け給ふもの」の該当箇所とした上で卷一【三八】の説明にあったと中納言が勘違いしたもの、〈全注釈〉語注では別解として、先に吉野聖が唐后から託された尼君宛の手紙に吉野姫君に言い伝えておくべき秘密事があったもの、という各解釈を示す。

○いとあてはかに思ひまさられて―唐后が妹の世話まで頼むとは言わない態度を、中納言はたいそう奥ゆかしく感じ、自然と思ひ募らせるようになって、の意か。「あてはかなり」は、優美に、みやびやかに、の意。また、「思ひまさる」を、〈新全集〉は吉野姫君への恋心が募るの意に解するが、唐后への恋心ゆえに、わび住まいする母吉野尼君ばかりか、異父妹の姫君にも関心を高める一連の過程であろう。諸注で解釈が分かれており、〈大系〉は、吉野尼君の生活が大変高貴だと一層思ひなさつての意、〈新全集〉は、なかなか品のいい感じだと吉野姫君への思いが（自然と）募つての意、〈全注釈〉語注は、吉野姫君に秘めやかな思いを寄せなさつての意、〈新註〉は、姫君に（自然と）艶な好奇心にそそられての意、にそれぞれ解する（〈桜楓〉でも吉野姫君へ関心が向かう文脈を指摘）。つまり、「る（↑れ）」を自発（〈新註〉・〈新全集〉）をとるか、尊敬（〈大系〉・〈全注釈〉語注）をとるかでも解釈が分かれるが、この場合は心

情をひき起こす自発であり、中納言への敬意は文末の尊敬語「遣はす」一語で表しているのであろう。

○かくてなむ侍るべき—こういう事情なので、引き続き滞在します。前文の心情「立ち帰り給ふべき心もし給はず。」を実行に移すために、吉野聖へ告げた言葉。既に中納言は、【一二】で吉野尼君に「しばしこの聖の室に候ひて、御宿直なむどもと思ひ給ふれば」と深吉野への滞在延長を告げていたが、今実行するに至った。

○京に御文ども書きて遣はす—「御文ども」は、京の大將大君や左大將・中納言母夫妻へ深吉野滞在の延長を告げる各手紙。おそらくこれに前後して吉野尼君・姫君らへの援助物資などの送付を京の家司へ指図する手紙も送っているであろうことが、後文における深吉野近くの莊園への指図(【二三】)との兼ね合いで推測される。ここで、中納言の深吉野滞在第一日が終わる。

【参考Ⅰ】「北の対」をめぐる吉野尼君の住まいの全容と意味合い

本区分の最初に描かれる吉野尼君の住まいの描写「ささやかなる寢殿だつものこそ、北の対にや、一つあれど」については、住まいの全容における「寢殿だつもの」と「北の対」との兼ね合い、「北の対にや」と推測される理由(前提とされている機能)といった諸問題がある。

住まいの全容の解釈に関して、「寢殿だつもの」の「寢殿」は〈大系〉〈新全集〉〈全注釈〉の解に従い寢殿造全体ではなく寢殿単独と解した上で、寢殿めいたものに付随し「北の対」らしきものが「一つあれど」と解した。「寢殿」の作中全三例は皆「寢殿の……面」で寢殿単独の意である。寢殿が一つなのは当然と考えられるため、付随するのが北の対の屋一つだけである特殊性(邸宅の規模の貧相さ)に言及したものであろう。また、〈大系〉は「北の対にや」を中納言から見える範囲の景とするが、解し難い。建物を全体的にとらえた情景として考えた方が自然であらう。

寢殿との位置関係から考えれば、「北」の対であるのは自明のはずなのに、殊更に「北の対にや」と記すのは、対の屋にしてはあまりにも貧相な造りであるためである。そんな貧相な造りでも言及されているのは、藤田勝也「北対の変容」(『日本古代中世住宅史論』Ⅰ編第一章 中央公論美術出版 一九九〇年初出)の指摘する通り、「北対が貴族住宅に不可

欠の殿舎だった」という当時の常識に拠るものであろう。藤田氏は同論文において、寝殿造における北の対の重要性を裏付けるものとして、「わずかな事例とはいえ、東・西対やさらには寝殿不在の邸においてさえ北対は存在したという事実がある。」と述べ、『左経記』長元四年（一〇三一）十二月十三日条の割注で記される丹波守源章任の三条第が「本自無寝殿、只所東対代・北対許也」で、馨子内親王（後一条天皇第二皇女）の斎院として用いる際に「仍以東対代為御所、以北対女房曹司」という措置を講じた例を掲げる。概して、藤田論文も指摘の通り北の対自体が平安中・後期には古記録類で言及されることの少ない存在ではあるが、やはり寝殿がなくとも「北対」の造成が不可欠な表れではないか。増田繁夫「寝殿造における寝殿・対の屋以外の建築物」（『王朝文学と建築・庭園』竹林舎 二〇〇七年）においては、寝殿造（増田論文は当時の呼称が「如法家」であると指摘）が「そんなに多くはなかった」ことの一例として掲げている。

もっとも、寝殿のない三条第は、経済事情の反映とはいえず、後一条天皇の乳母子であった丹波守源章任の所有していた複数の邸第の一つに過ぎない（『小右記』万寿四年（一〇二七）八月二日・二三日、九月六日、長元四年（一〇三一）三月二二日の各条にも「章任（朝臣）桂宅」が見える〈榎野廣造編『平安人名辞典―長保二年―』高科書店 一九九三年、平安時代古記録フルテキストデータベース〉。大斎院選子内親王の退下による急な卜定に伴い必要になった、馨子内親王の初斎院の場所としてとりあえず用意されたと考えられる。

当該箇所における吉野尼君の住まいの描写は、「ささやかなる寝殿だつもの」に加えて「北の対にや、一つあれど」と断言を避けつつ言及したことで、貧相さを重ねて強調し、荒廃を記した後続部分「いみじう荒れ惑ひて、人声もせず。」と相まって、深山での生活の過酷さを示している。ただし、貧相なりとも「北の対」に言及するのは、吉野尼君が出家し貴族社会からは隔絶された深山に隠遁しつつも、貴族の住む寝殿造としては最低限の条件を辛うじて維持している、いわば境界線上の生き方を確認したものであろう。

【参考Ⅱ】楽の音関連以外の「松風」表現と「身に染む」「心細し」「耳近し」

「松風」の和歌的表現は、漢詩題「松風入夜琴」により琴の音との響き合いを詠んだ『拾遺集』（巻八・雑上・四五二）

の斎宮女御（徽子女王）歌「琴の音に峰の松風通ふらしいづれのをよりしらべそめけむ」（『拾遺抄』卷一〇・雑下・五一四では第三句「かよふなり」・第五句「しらべそむらむ」）が最も有名である。ただし、一方では当該箇所のように、楽の音とは関係なく専ら寂しさ・心細さ・悲しさ等を詠んでいる用例もある。

和歌の例では、古くは「我を君とふやとふやと松風のいまはあらしとなるぞかなしき」（『古今六帖』第一・歳時・天・嵐・四三四）を初め、本作品の成立期には、「まだ人め知らぬ山辺の松風も音して帰るものところ聞け」（『更級日記』万寿二年（一〇二五）秋条）や、「松風は色やみどりに吹きつらむもの思ふ人の身にぞしみける」（『後拾遺集』卷一七・雑三・九九一・堀河女御（『小一条院女御延子』）、「しづのをになびきながらも身にぞしむくらゐの山の峰のまつ風」（『相模集』思・三〇八）などがある。

散文では、松風を「耳近う」聞く心細さを記した例、『更級日記』長元九年（一〇三六）秋条での情景描写「〔父孝標と再会した西山の〕南はならびの岡の松風、いと耳近う心細く聞こえて」も当該箇所と共通した趣向で注目される。

後代の『とりかへばや物語』では、吉野山の「（峰の）松風」の用例が、卷一と卷三で見受けられる。このうちの卷一、女中納言が吉野山滞在中に吉野宮の姉姫君と初対面時に交わした贈答歌をめぐっては、『源氏物語』明石巻の楽談義の影響場面も先行して見受けられ、当の贈答歌でも「峰の松風」は楽の音との関連から引き合いに出されていた。それが、同巻の装束献上や帰京時の贈答歌、卷三の男装を解くにあたっての惜別の贈答歌になると、楽の音から離れて専ら吉野山の環境を強調したものとなっており、全体的には本作品の設定・趣向からの強い影響が窺える。吉野宮の姉姫君との贈答歌で、「（峰の）松風」は「心」や「うき」身「あらし（嵐・あらじ）」などと共に詠まれてもいる。